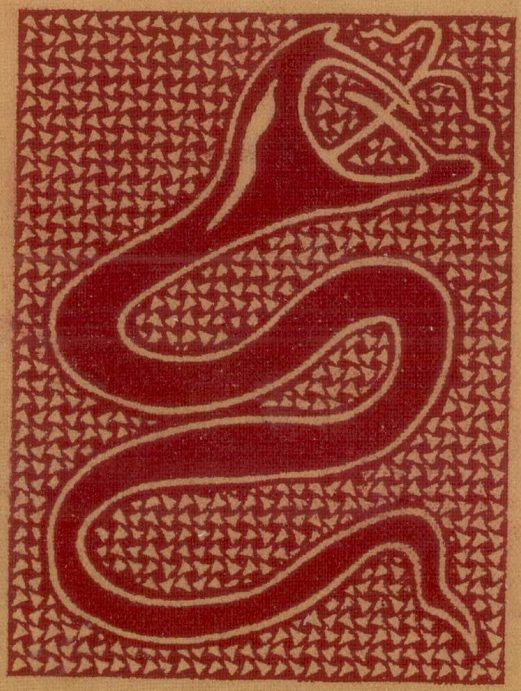
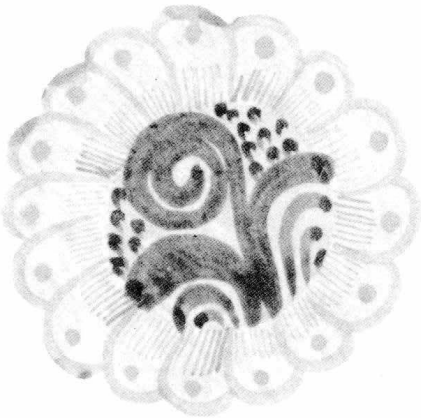


ガラスの靴・い仲間



安岡章太郎全集 III

安岡章太郎全集 Ⅲ
ガラスの靴・悪い仲間
昭和四六年三月二〇日　第一刷発行

著　者　安岡章太郎
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号　一一二
電話（九四五）一一一一（大代表）振替東京三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
定　価　一二〇〇円
© Shotaro Yasuoka 1971, Printed in Japan
乱丁本落丁本はお取り替えいたします。

0393-135533-2253（0）　（文1）

安岡章太郎全集Ⅲ

ガラスの靴・悪い仲間

目次

ガラスの靴 7
ジングルベル 35
宿題 51
愛玩 91
蛾 109
ハウス・ガード 129
陰気な愉しみ 149
悪い仲間 167
剣舞 205
麦藁帽子の頃 239

築地小田原町　263
サアヴィス大隊要員　285
吟遊詩人　333
旅愁　351
王様の耳　407
家庭　429
解説
シンデレラの影　阿部昭　443

装幀＝田村義也

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

安岡章太郎全集Ⅲ

ガラスの靴・悪い仲間

ガラスの靴

夜十二時をすぎると、日本橋もしづかになる。

ときどき高速度ではしり去る自動車のエンジンが、キインと大げさな物音を遠くまでひびかせる。

「どうしたの。」

僕は汗ばんだ受話器をもちかへ、テーブルに足をかけて、椅子にもたれた背をそらせながら、ベッドの中からかけてくる悦子の電話にこたへた。

「ああ、あたし、熊に会ひたいな。あなた、熊がお魚かついで歩いてるの、見たことある？」

「ないよ。」

「つまンなさうに返辞するのね。熊つていいなあ。熊は人間とお話しできるんですつて、ほんとかしら。」

「知らない。」

「だつて、あなたの田舎は北海道だつておつしやつたくせに。そんなこと、知らないの？」

僕は、うすい鉄板をわななかせて伝つてくる悦子の声をききながら、ガラス戸の中に、青黒い背中をそろへて並んでゐる猟銃の列をながめる。……ぺちやんこの胸、変にながい手足、子供みたいな悦子の軀は、抱きよせるとき、僕の胸のなかで折れさうになる。そのくせいつたん抵抗しはじめると、どこと云つて抑へやうのない、まるで水の底で海草にからまれたやうな始末の悪さなのだ。……何がいまさら、クマだ。僕はこころの中でつぶやく。いまのうちに何とかしなければならない。それはしかし、悦子の側の期待であるはずではないか。——熊に会ひたい。それは彼女の合図だ。

「夏休みも、もう終るね。……あと幾日ぐらゐ？」

「いや、いや。」

僕は、僕らの間でタブウになつてゐるそのことに、わざとふれてみる。

待つことが、僕の仕事だつた。

N猟銃店の夜番にやとはれてゐた僕は、夜の間、盗難と火気を警戒する役目なのだ。しかし、それは仕事にはならなかつた。弾薬室の扉のところに掛つてゐる湿度計と寒暖計、僕はそれと同

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

じだ。火事は、寒暖計で読みとるわけにはいかないし、闖入してくる盗賊とたたかふ勇気は、僕にはなかつた。僕はただ、火事と泥棒とがやつてくるのを待つだけだ。

そしてそんなものに待ちボウケを食はされることで、やつと僕のクビはつながつてゐたわけだ。住居のない僕はそんな風にして、ともかく朝晩のメシと夜の居場所を得てゐた。昼は、教室の椅子の上で寝るために、学校へ行つた。

店の主人にたのまれて、僕は原宿にある米軍軍医クレイゴー中佐の家へ、鳥撃ち用の散弾をとどけた。云はばそれは、僕には番外の用だつたし、そのうへ五月のはじめの暑い日で、途中クシャミばかり出ていやでたまらなかつたが、行つてみると僕は、ちよつとした歓待をうけた。やせた、色の青白いメードが、飲みものや菓子を出してくれた。彼女は僕をみて、テレたやうな、だまつてオナラした人がするやうな笑ひをうかべた。僕は彼女を羊に似てゐると思つた。紙を食つてゐる白い羊を、何とはなしに思ひ出させた。奥から、だいぶ年寄りらしい黒白ブチのポインターが台所のドアを自分で開けてやつて来たので、僕はチンチンさせるつもりでクラッカーを差し出したが、彼は見向きもしなかつた。彼女がそれにチーズを塗つてやるとやつと食べた。をはると犬は、チラリとうさん臭さうに僕をながめ、机の上に頬杖をつく学者のやうな顔をして、どたりと彼女の足もとに腹這ひになるのだつた。彼女はクレイゴー中佐が夫人同伴で明日からアンガウル島へ出掛けること、それで彼女は三月ばかり一人で留守番をさせられることなどをぽつりぽ

つり話した。僕が帰らうとすると、彼女はもつと居ないかと云ひ、パイプをくはへようとする僕に、シガレットを出してくれた。彼女の動作は変によわよわしい。マッチをすつてくれるときに、火の出るのを怖れるみたいに、軸木のハジの方を不器用につまんで、おそろしく真剣な顔つきになるのだ。僕はふと、彼女を、そだちのいい人ではないのかと思つた。

その日、僕は意外にゆつくりしてしまつた。帰りしなに彼女は、またあのテレたやうな笑ひをうかべて、よかつたらときどき遊びに来てくれと云つた。僕は彼女の言葉にしたがつた。その方が、かたい椅子しかない学校へ行くより余程よかつたから。

そんな風にして、悦子と僕はしたしくなつた。しかしそれにしても、後になつて彼女に惚れてしまふことにならうとは、気が附かなかつた。どちらかと云へば、彼女は魅力のとぼしい方だつた。

一週間ばかりたつて、或る日行つてみると、彼女は病気だからといつて、テニスのラケットの模様のついたユカタを着てゐた。僕がその模様を子供つぽいとひやかしたことから、話は小学校の頃の夏休みのことになつた。悦子は自分は優等生だつたと云つた。さう云へば、彼女の青白い皮膚や、へんにキチンとした身なりに、いかにも級長さんらしい所があつた。けれども、学校の

はじまるのが厭だつたのは、ビリだつた僕と同じだつた。終りに近附いた休みの日が一日一日と消えて行くときの憂鬱さ。活気のなくなつた暑さの中でひとりぽつねんと子供心に感じる焦躁。そんなものが僕たちの心によみがへり、それがなつかしいと云ふよりは、ジカに二人の気持ちにふれあつた。僕は云つた。けふもまた怠けて遊んでしまひ、手のつけてない宿題帳の山をながめながら、ヒグラシの鳴くのをきくのはやりきれなかつた、と。すると彼女は突然きいた。

「あなた、ヒグラシの鳥つて、見たことある？」

僕は驚いた。悦子は二十歳なのだ。問ひかへすと、彼女は口もとにアイマイな笑ひをうかべてゐる。そこで僕は説明した。

「ヒグラシつていふのはね、鳥ぢやないんだ。ムシだよ。セミの一種だよ。」

悦子は僕の言葉に仰天した。彼女は眼を大きくみひらいて、——悦子の眼は美しかつた——

「さうオ、あたし、これくらゐの鳥かと思つた。」

と手で、およそ黒部西瓜ほどの大きさを示した。……僕は魔法にかかつた。ロバみたいに大きな蝶や、犬のやうなカマキリ、そんなイメージが一時にどつと僕の眼前におしよせた。僕はたまらなく愉快になり、大声をあげて笑つた。すると彼女は泣き出した。

「あなたのおつしやることつて、嘘ばつかり。だつてあたし見たんですもの……軽井沢で。」

さう云つて彼女は、僕の肩によりかかつて泣くのだ。

ポロポロ涙が頰をつたつて流れてゐる。僕は狼狽した。
「さうだね。軽井沢にはゐるかもしれない。ほんとは、僕はまだヒグラシなんて見たことがないんだ。」
僕は彼女を横から抱いてみた。しばらくさうしてゐた。濡れて光つてゐるので眼がいつそう大きく見えた。ウブ毛のはえた白い顔を見つめながら、僕は彼女の体臭をかいだ。それは子供の臭ひだつたかもしれない。しかしその乳くさい臭ひが不意に僕に、女を感じさせた。僕は髪の毛をかきあげて、耳タブに接吻した。悦子は僕のするままになつてゐた。
あとになつて、僕は不安になつた。自分のしたことが、よほど下卑たことに思はれた。それに僕は、悦子の了簡をはかりかねた。彼女は本当に何も知らないのだらうか。困惑した僕は、たかだか自分の唾液で女の耳を濡らしたにすぎないことを、ひどく誇張して考へた。軽井沢には西瓜ほどのセミがゐるなどと、それが僕にはどうやら本当のことになりかかつてゐたのだ。ところが、実際は「嘘つき」は悦子の方だつた。その晩おそく、彼女から電話がかかつて来た。
「どうした。気分が悪いの？」病気だと云つてゐた彼女は、昼間のことがタタつて熱を出したのかも知れぬと、僕は受話器の前でせきこんだ。すると、彼女はこんなことを云ふのだ。
「カエルがいつぱい飛んで来て、眠れないの。……あたしの顔に冷いものがさはるのよ。電気をつけてみたら、雨ガエルなの。何処からはいつて来たのかしら、ベッドの上にいつぱいゐるの、

……小さな、小指のさきぐらゐの雨ガエル。」

僕はそれは信ずべからざることだと思つた。もし、カエルのことが本当だとしても、もう二時にちかいのである。もはやこれは、彼女のワザとやつてゐることにちがひなく、とすれば昼間の「ヒグラシ」もまた彼女のつくりごとではないだらうか。そして彼女は、僕の疑ひを裏書きするかのやうに、その後同じ方法を何べんもくりかへして使ひはじめた。たとへば彼女は、木や、草や、獣や、そんなものの名をいちいち僕にしつつこく訊ねるのだつた。そして、ふと「あなたつて知つたかぶりね。何でも知つてるふりするのね。もつともらしい顔して。」とケラケラ笑つて喜ぶのだ。そんなとき彼女は、オモチャのやうなセルロイド製の黄色い腕環を、ひけらかすみたいにはめてゐた。

けれども、同じことを何べんも反復するのは、悦子のクセでもあるらしかつた。単純なトランプのペイシェンスを、半日も続けてやることがあつた。クルミ割りがこはれたときのことだ。僕が、中学生のころ運動部の合宿でやつた、ドアの蝶つがひにクルミをはさんでつぶす方法を教へると、彼女はすつかりそれに熱中してしまつた。はじめは菓子につかふから、三つか四つ割ればいいと云つてゐたのだが、食堂の大きなドアのまはりをぐるぐる息をはずませて駈け廻り、「ほら」「ほら」と一つ割るたびにいちいち得意になる。それでこちらも、「うん、なかなかうまい。」と調子をあはせるうちに、失敗して、皮も肉もいつしよにつぶれたりすると、「よウし、こんど

こそ」ともう夢中で、ふだん汗かきでないことを自慢にしてゐる額をビッショリぬらしながら、重いカシの扉をばたんばたん云はせて、もう何時はてるともキリがない。……犬のスペックスはおどろいてガンガン吠えるし、この日僕はクルミの食ひすぎで、頭が完全にをかしくなつた。

だんだん僕はづうづうしくなつた。朝、つとめが終ると、すぐ悦子のところへ出掛けて行き、シャワーを浴びてから、居間の長椅子でひと睡りするのが、いつか僕の習慣みたいになつてしまつた。入口のドアを開けてはいつて行くとき、僕は、たつたいままで夜番だつた俺がこれからは泥棒になる、とをかしい気もするのだが、昼寝から醒めた頃にはもう悦子の作つてくれるコーヒーを、「すこし水つぽい。」などと云ふのだつた。同じことが悦子についても云へた。絨毯の上にそのまま横坐りした彼女が、片ヒジを皮のストゥールにのせて、うつむき加減に本を読んでゐるときなど、うつかり僕は、彼女がずつと昔からこの家でそだてられた娘であるやうな錯覚を起した。ちやうど居間の片側の壁に、汽車のコンパートメントみたいな作りつけの椅子のある一間ほどの出つぱりがあつて、そこにいかにも悦子の好みの煖炉が切つてあつた。焚き口に、石炭にみせかけた黒いガラスのかけらが山のやうに積んであつて、その奥に色電燈が仕掛けてある。スイッチをつけると、黒いガラスは中側から赤く光り、燃えてゐるやうに緑や黄いろの焔をあげる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com